

全学フォーラム：奈良女子大学における教養教育の再構築のために 第4回の報告

2014年3月3日に第4回全学フォーラムを開催しました。今回は「教養？実用？——大学での外国語学習の意味を問い直す」と題して、これまでのフォーラムで残されていたテーマの一つである、外国語教育のあり方について集中的に議論しました。本学は外国語教育の意味をどのように考え、カリキュラム設計をすべきか。学生や社会は何を求め、それにどのように応答すべきか。——英語を担当しておられる中川千帆先生と、第二外国語（中国語）ご担当の谷口洋先生に、議論のきっかけとなる話題提供をお願いしました。以下、参加者の発言の概要をご報告します。

■ 英語担当教員の立場から 文学部・中川千帆先生

英語教育では「教養か実用か」という問いを立てること自体、この二項対立的思考自体、有効ではないと考えています。大学レベルでは、教養としての英語があれば実用に耐えるはずであると考えからず。これから教養教育改革を行う上で目標とすべきことは、実用とか教養とか言わずに、シンプルに高い英語能力をもつ学生の育成です。ただそれだけを目指すべきである、と言わせていただきたいと思います。

英語科目は、ほぼ必修科目となってしまう。他の言語を選べるとはいえ、多くの学生が英語を選択しています。ということは、仕方がないから取っているという学生も多くいるということです。そういう学生も何とか卒業させなければならない。学生の学習意欲や目標がバラバラな中で私たちがすべきことは、専門学問分野や社会において活用可能な英語力の基礎を築くための英語の授業であると考えています。目安としては、大学に進学する英語圏の人々の高校レベルの英語力、つまり、専門的な英語の能力を身につける素地となる英語力を、教養としての英語で培っていきたい。したがって、専門ではなく、新聞や雑誌を自在に読むことのできる能力を身につけさせたいと考えています。読んで理解できないことを聞いたり、話したり、書いたりすることは決してできません。Readingを中心に学生たちのレベルをしっかりと上げていくためには、少人数の習熟度別クラス編成をしたいと考えています。ただ、現在1クラスが40人以上になっているため、さまざまなレベルの学生が混在しており、それぞれの学生にあったレベルの授業をすることが困難な状況にあります。

より高度な英語教育の方法として英語のみで教える授業を提案されることがありますが、さまざまな大学でそのような授業を行った経験からいえることは、ある程度の英語力を備えた学生を対象にしない限り、効果は非常に低いということです。理解できない学生たちに延々と英語でしゃべっても、教員が孤独な思いをする。学生た

ちは、授業後に「一体今日の宿題なんだったの？」としゃべっていて、これってやって意味があるのかなど。英語のみの授業をすればTOEFLのスコアが上がるのではないかという幻想は捨ててください。プラスアルファで英語力強化のクラスを設置するとすれば、学生の英語での発信力を高めるために、ごく少人数クラスでの和文英訳ではない英文作成を、たくさんの学生が履修できる形で開講することを提案したいと思います。原稿ができていれば、プレゼンテーションはできる。そこから会話も生まれるはずです。例えば、英語教育に定評のある国際基督教大学には、ELAというリベラルアーツのための授業があります。そこでの重点は、会話ではなく読解力や記述力にあると明言しています。そして、読解力の上に、書く能力があるのです。

これまで、一般基礎英語としては、基礎英語で学生たちが授業外に自習するシステムをe-learningで採用してきました。2年前に契約更新の予算が出ないということで、残念ながらやめることになってしまい、その結果がTOEICの成績低下につながっているとみています。語学は、ただ授業を受けるだけで身につくものではありません。履修補助システムを充実させていくべき理由はここにあります。資金を獲得してe-learningやLL教室を用いた自習プログラムを整備していくことが、より理想的な英語教育をするためのポイントになるのではないかと考えています。



■ 第二外国語担当教員の立場から 文学部・谷口洋先生

現在、英語以外の外国語には専門基礎科目としての意味づけがほとんどなくなっていますが、にもかかわらず、実用的なものが求められている。この掘じれについて考えてみるのも、それだけで面白いテーマになると思います。大学の専門に直結する学生は非常に少数なんですけども、だからといって実用にならないかという、そうとも言い切れない。教養か実用かは、実は二分できない。何とも割り切れないんですが、この割り切れなさが、英語とは違う第二外国語の意義であろうと思うわけです。

学生にとって、異文化を知ることが、第二外国語を取ってよかったと思ってくれる大きな点です。英語でも異文化理解は重要な側面だと思いますが、英語以外の語学の場合には、そこにいっそう重要な意味がある。これは無視できないと思います。しかし、そうは言っても語学の授業です。やはり学生は語学の授業にきたら語学がわかるようになりたい。文法が難しいといっても、「そんなのやらなくてもいい」という学生は見たことがありません。

第二外国語の場合、わかるようになりたい、使ってみようという素朴な願望がある。それは大学の専門科目につながるものではないですが、教える側としては、受講するからにはわかってもらいたいし、何でもいから中国語を取ってくれたらいい、という感覚なんです。たとえばはじめは反中国であろうと、中国語がわかるようになったら見方が変わるだろう、というのが正直なところなんです。ネット上に中国語で何が書かれているのかを見てほしい。そんなに反日ばかりでもないんだ、とわかるようになってくれたらいいんですけど。

国際交流が進み、理学部でも生活環境学部でも「英語以外に第二外国語をやりたい」という学生が出てきている。しかもそういう学生は学習意欲が高い。英語以外の外国語を学びたいという意欲は、専門基礎科目とは別の次元にあるのです。語学は卒業要件に関わりますので、科目群と単位の設定には、それなりの合理性があると思います。そこをいじるべきかどうかは私からは申しあげられないですが、学部の区切りでもって語学の教育内容を教える側が決めてしまうのは適切ではないと思います。

語学はコミュニケーションのツールですから、初めて習う言語をどのような人から学ぶかは、実は大変重大なことです。第二外国語は大学に入って新入生が最初に接する、初めて習う、新しい内容の授業です。そして、教員との距離が近くて、学生同士も近づきやすく、緊密な人間関係ができやすいという特徴をもっている。このように、英語以外の語学には、単に教える内容だけではなく、いろいろな要素が入ってくる。つまり、大学の印象を決めてしまうほどの重要性をもつ科目であると言えます。その担当者として、初年次教育において新入生を導く責任を感じています。

中川先生に「英語能力をもつ学生を育てたい」と言い

切られると、本当にまぶしく感じます。私たちも、考えていることは同じなんですけれども、そこに違う要素が入ってくる。新入生の教育、学部を越えた教育であるために、必然的に大学全体をみなければいけない立場に立たされているわけです。そういう人間が大学にいるんだということを理解していただければと思います。

■ コメンテーター 理学部・三方裕司先生

理学部学生の語学の成績が悪いことにショックを受けました。化学の場合は、元素記号や構造式など、言語以外のところで十分コミュニケーションが取れる。数学の場合は、数式さえあれば外国人とディスカッションできる。言語以外に業界共通のコミュニケーション・ツールがあるため、外国語を学ぶ必然性や重要度に対する認識が文系の学生に比べて低いのかもかもしれません。

FDの授業見学では、僕自身も勉強になるので外国人の先生が担当されている英語の講義に行くのですが、学生の反応は悪いですね。先生に対して失礼だなと思います。わかっている学生はわかっていると思いますが、先生の質問が理解できてない学生が多い。この部分については、レベル分けが必要かなと思います。

■ コメンテーター 生活環境学部・芝崎学先生

今回コメンテーターを引き受けるにあたって、生活環境学部の先生に依頼したところ、一部の先生方からコメントをいただきました。また、学生がどう思っているのかもわからないので、アンケートを取ってみました。衣環境の先生方からも、学生アンケートからも語学ではレベル分けをした方がいいのではないかという意見が出ています。レベル別、習熟度別のクラス編成をしてもらった方が、学生も教員も、よりそれぞれのレベルに合わせた授業ができるのではないかと思います。例えば、5段階評価でReadingとListeningのクラスを分ければ、「コミュニケーション能力を高めるためにきたのに、そうじゃなかった」というような学生の意見も少なくなるのではないのでしょうか。また、我々の考えている「実践的」というのと、語学の先生が考えている「実践的」というのに、そもそもギャップがあるのかなと思いました。

学生は、英語は使うかもしれないが第二外国語は使わないかもしれないと考えている。授業自体は楽しかったが何に役に立つのか、という意見もある。その一方で、もっと多くの言語を勉強したいという意見もあります。食物の先生からは「15コマをいくつかの言語に分けて履修することはできないか」、「ちょっとした会話と国の情勢を学ぶ形で多くの言語を学ぶ方が、より海外に対して興味をもつのではないか」という提案がありました。また、「せっかく奈良にいるのだから、奈良の文化を学びつつ、それを学んだ言語で説明できるようになる授業があったらいい」という意見もありました。

① e-learning システムについて

■ 文学部・横山茂雄先生

e-learning はシステムの更新期に、予算がないということで廃止されました。システムの廃止と、その後には本学の学生の TOEIC のスコアが低下したこととの相関関係を厳密に証明するデータはありませんが、担当者として、e-learning システムでの個別の学びを授業内で補完する形で試験もやって、学生に勉強させる場をつくれれば効果はある、という感触はもっていました。

■ 附属中等教育学校・吉田隆先生

総合情報処理センターでシステム更新の議論をする際に、どうしても予算が減ってきているので、全学に関わるものを中心という話になります。e-learning に関しては、大学全体で学生の英語力をどう高めていくのか、という議論はなかった。全学の教養教育に必要なという観点から議論されていたら、また変わっていたかもしれません。

■ 副学長・小路田泰直先生

「金がない」というのが、この大学の唯一のイデオロギーですね（苦笑）。必要なのは、限られた金をどう使うのかという知恵の出し合いです。教養教育改革を本気でやるために、理学部や生活環境学部の先生方が語学教育に対して思っておられることを、まずはきちんとぶつけていただきたい。

②理系と文系それぞれに求められる英語力の違いについて

■ 理学部・渡邊利雄先生

理系は数式や化学式があるから語学に依らない学問だというのが、むしろ、語学力がないと生き残れないのではないかな。自分の学問を「面白い」と語れなければお金を取ってきくこともできないからです。ただし、我々が期待しているのは、新聞や雑誌を自在に読める英語力ではなく、国語でいう論説文を読む英語力です。それぞれの領域で要求されている内容が違うので、英語を教養と一括りにして、すべての学生に同じレベルを求めるべきなのかどうか。我々にとって英語は、もはや教養科目というより、それがないと生きていけないものなのです。

■ 文学部・横山茂雄先生

私の経験からいうと、多くの学生は英語の根本のルールがわかっていないのだと思います。とにかく単純に英語がわからない、というレベルなので、専門基礎の英語か教養としての英語かという二項対立で考えても意味がない。

③語学クラスのレベル分けについて

■ 文学部・吉村あき子先生

現在、英語のクラスは単純には名簿で振り分けています。そのため、アンケートを取ると、同じクラスの中でも難しいという意見と、やさしいという意見が出てきますが、教員はある程度のところに焦点をあてるしかない。それが効果的かどうか……。少人数のクラス編成は確かに余分なお金がかかってくるけれど、習熟度別のクラス編成は、それとは別に考えられるし、考えなくてはい

けないと思います。

■ 生活環境学部・駒谷昇一先生

英語を勉強するモチベーションをベースにクラス分けをすれば、学習意欲も学習効果も高まると思います。研究者になりたい学生は論文を書くため、企業に就職したい学生はグローバルに活躍するため、というようにモチベーションごとのクラス編成も可能ではないでしょうか。

■ 文学部・天ヶ瀬正博先生

制度設計を考える際には、学習者の視点が必要です。学習者が、目標を自ら設定した上で、どこまでできたかを自ら問えるようなクラス編成にするのも、一つの案だと思います。教員の教えやすさという観点から習熟度別クラスを考えるのではなく、学生が大学に入学した時点で何を学ぶのかを自覚し、自らの学びを反省できる体制づくりが必要だと思います。

■ 文学部・横山茂雄先生

モチベーション別のクラス編成についてですが、一度試行したところ、努力せずにより成績がでるところに学生が集中してしまったために、数年でやめることになりました。

④第二外国語について

■ 文学部・谷口洋先生

理学部と生活環境学部の一部の学科は、カリキュラム上、一か国語だけの履修でもいいのですが、英語だけ取る学生は、どんなに多く見積もっても二割程度だと思います。はっきり言うと、英語が嫌いだから理学部にきているという学生も多い。だから、できるものなら英語以外の語学を取りたい、ということもあるでしょう。そういう学生もなんとかしないといけない、というのが私のスタンスです。

■ 文学部・小山俊輔先生

「異文化理解と平和構築」や「異文化理解と国際理解」という授業を教養教育でやっています。JICAや青年海外協力隊の人に話をしてもらおうと、それに刺激をうけて、ケニアやベトナムへボランティアに行く学生もいます。知識を与えたり、簡単な語学を勉強させたりすることによって、学生がアジアやアフリカへ出ていく。また、スペイン語を学べば中南米に出ていく機会が増えるだろうと。これは今までの経験から確実に言えることです。

■ 文学部・山辺規子先生

学生はもっといろいろな外国語を勉強したいという希望をもっています。今回、長い間の懸案であったスペイン語が開講されるのは喜ばしいことです。ただ、新たにイタリア語を開講してほしい、というような話になると、その資格のある人が必要になります。

■ 副学長・井上容子先生

留学する学生に英語を学ばせるために、どういうヒン

トがあるかなと思って来ました。どういうものを提供するののかという大きな課題と、それを実現するために、どういうツールやスタッフを用意しておかないといけないのかという具体的な課題があると思います。実現するためには現実と妥協することも必要ですが、しかし、まずは「こうあるべき」ということをきちんと提案していただくことが大切です。その上で、「こうあるべきだけど、ここで我慢している」という状態を示していただけると、具体策を考えていきやすいのではないのでしょうか。

■ 当日参加しておられたドイツ語・ドイツ文学の吉田孝夫先生が感想をお寄せ下さいました。

4人の先生方のお話は、基本的な事柄の整理と確認のために、そしてまた引き続いて行われた各論の検討のためにも、非常に有益なものでした。心より感謝申し上げます。そういえば授業アンケートの配布資料がありましたが、「よかった点」と「改善を要する点」の双方に書かれていた具体的なコメントは、どちらもわたし吉田の授業へのものだったように思います。当時それを書いた学生が、後で物好きにもアンケートのことをわたしに話しましたので、その記述がどの学生のコメントなのかを今も覚えているのですが、彼女の書いた意図は、先般の会議の席上で紹介されたようなニュアンスとは、少し異なるものでした。それぞれのクラスがもつ独特の空気の中で、しかも一気呵成に書かれたアンケートの自由記述から、その数行のどこに重点があり、何が本当に彼女の言いたいことなのかを、報告書の名のもとに摘出してゆくのは、かなり難しい作業であると改めて感じた次第です。

ともかくも、その授業アンケートは、授業への満足度を尋ねているように思います。満足度なるものはよくわかりませんが、学部4年間のどこかの時点で（本当はもっと後でもよいのでしょうか）、学生さんたちが、身に沁みるような達成感をもてることは大切だと思います。そして達成感をもつためには、明確な目標が必要です。英語であれ、ドイツ語であれ、授業を受ける学生さんの目標は何なのでしょう。そしてその目標は本気で立てられたものでしょうか。

英語のクラス分けについて、レベル（センター試験の点数など）によるか、モチベーションによるかの議論がありました。わたしは端的に後者に賛成しますが、しかし学生というものは所詮、易きにつくのだという、英語の先生から出された経験談もまた、たいへんに重いものでした。例えばですが、教材をレベル別でなくジャンル別にすることは可能でしょうか。リーディングとアカデミック・ライティングのどちらを重視するかという議論もあり



ましたが、つまり教材をその段階から区別し、選択させることは可能でしょうか。理系的な英語のアカデミック・ライティングならば、いわゆる英語の先生でなくとも担当していただけたと思います。それが教員相互の負担の軽減とやりがいの増加につながるならばですが。

またリーディングとアカデミック・ライティング、英語でのプレゼンテーションを組み合わせ、グループ発表と小レポートを到達点に置くゼミ形式の授業は可能でしょうか。文学部の一部の先生方が「学ぶことと女性のライフスタイル」という有意義な授業で展開しておられる形を、すべて英語ですることはできないでしょうか。はじめの数回は何らかのテキストの講読を入れてもよいかもしれません。そしてあくまでも基本は、学生たちによる自主的なテーマ設定と文献のリサーチ、そして発表資料の作成、プレゼンテーションを行ってもらう。学期末にはまとめの作文を入れてもよいと思います。学期中は、基本的に学生を見守っていればよいこの形は、担当教員の負担を増やすのか、それとも楽にするのか、どちらなのでしょう。

学生の達成感というものが、今まで知らなかった、新しい事柄への好奇心と、それを理解できたことの喜びから生まれるのなら、机におとなしく座った大学受験までの英語学習から、上記のような形で思い切って差異化することもできるかもしれません。（蛇足ですが、その点、初級ドイツ語はまだ目新しいものだけに、学生の好奇心をひきつけやすい科目です。大学で英語を教える先生のご苦心はたいへんなものだと思います。しかし実用性からのモチベーションは、ドイツ語ではきわめてもちにくい。）ドイツの大学が休暇中に外国人学生向けに開いているドイツ語講座では、4週間ほどの語学学習の最後に、このグループによるプレゼンテーションを入れています。ドイツ語を始めて1年ほどの学生でも、何とかそれをやり遂げ、そしてドイツ人の先生から修了証を受け取ります。中学生から英語を学んだ日本の大学生ならば、それよりはきちんとしたものを発表できると考えます。

ともあれ、旧制高校的な古めかしい教養理念に守られてきたドイツ語の教員としては、「それを話している人が多い」というスペイン語や、食べ物のおいしいイタリアの言葉にやがては駆逐されていくのでしょうか。それはとてもスリリングな未来ですが、スペインやイタリアと同じ程度には、ドイツの言葉と文化もまだそれなりに、生き方の糧になるもの（大学の授業の目標は、そこにもあると思いますが）を備えていると信じて、毎年、週2回の1回生向け文法授業に取り組んでいる次第です。いろんな人が寄り集まるクラスの、その第1回の授業でわたしがすることは、各人の目標の設定です。